

IBD 治療薬の適切な使い方について

1) 基本薬 5ASA 剤についての誤解!?

ペンタサ、アサコール、リアルダなど 5ASA 剤の開発は古く、1940 年ごろ関節リュウマチの治療薬としてサラゾピリンが欧米で発売されました。しかし副作用が多く、副作用を起こすサルファサラジンを除き、有効成分 5ASA 単独のペンタサ、アサコール、リアルダが IBD に対して開発されました。腸管に直接届くように、かつ有効性を高め副作用を軽減するため種々の改良がなされました。5ASA 剤は、大腸や小腸に起きた慢性の炎症を直接抑制する作用があり、免疫を抑制することもなく、長期に使用しても安全であり、副作用も少ないため、中止しないで毎日続けていくことが重要です。炎症が抑えられ寛解導入できた IBD 患者さんに、再度炎症が起きること（再燃）のないようにし、炎症のない状態を維持する（寛解維持）のに基本の治療薬です。しかし最近、IBD の大切な基本薬である 5ASA 剤について困った中止や使用が増えているように感じています。

問題（1）5ASA 不耐だから一生 5ASA 剤は使えない!?

5ASA 剤にも下痢、発疹、肝障害、間質性肺炎など様々な副作用がありますが、5ASA 剤の特徴的な副作用として、急激な下痢の悪化や発熱・腹痛など潰瘍性大腸炎が悪化した時と同じような症状をもたらすことがあり、一部の専門家があまりにも大袈裟に強調するため、一般の医師の多くが「5ASA 不耐だから一生 5ASA 剤は使えない」と判断して投与を中止してしまうことです。5ASA 不耐は病歴の聴取や適切な検査により慎重に判断されるべきであって、安易に中止すべきではありません。

問題（2）5ASA 剤を始めたから一生使わなくてはいけない?

単なる急性感染性腸炎や虚血性腸炎など、原因のはっきりした腸炎が潰瘍性大腸炎と誤診され、5ASA 剤が開始され、その後使い続けられてしまうことです。これらの疾患は自然に良くなりますので 5ASA 剤が効いたと判断されてしまい、再燃防止のためという理由でその後無駄に使い続けてしまうことです。

2) 基本薬ステロイドについての誤解を招く情報

ステロイドは古くから、原因不明で慢性炎症をきたす種々の病気に使われてきました。潰瘍性大腸炎とクローン病では、炎症のある活動期に炎症を抑える（寛解導入）ために適用され、寛解導入薬としては 70～80% の患者さんに有効な効果の高い薬剤です。しかし、副作用として満月様顔貌（ムーンフェイス）、ニキビ、脱毛など容貌の変化が起こりやすく、長期使用により骨粗鬆症や糖尿病の悪化などをもたらす、患者さんも身近の方での副作用を見てきたことが多いこともあって、「ステロイドは絶対使いたくない」という方が増えています。最近の新薬と比較して、やはり「ステロイドは怖い薬だから一生使いたくない」と考える方が多いようです。古くから使用されているステロイドはその長所や短所もよくわかっておりますが、臨床の現場ではステロイドの適切な使用が行われていないことが多く、漫然と長く使うことが一番問題です。「寛解導入には短期で使用し、効果がなければ他の治療を決断することが大切です。効くからといって長期に使用してしまい、ステロイド依存となり骨粗しょう症を生じて骨折することがあるので、適切な寛解維持薬を用いて長期のステロイド使用を避ける。」ことを医療側も認識することが重要です。

今回は、IBD の新薬についてその長所や短所についてお伝えしようと思います。

日比紀文
慶應義塾大学名誉教授
令和 6 年 10 月 1 日